「塚目太郎家政」をたずねて

――福島県桑折・国見町の調査から――

小松寿治

調査の発端

昭和六十二年三月に刊行された『福生市史資料編　中世・寺社編』に掲載の「駿河伊達系図」[1]の中に「武蔵国フツサ」に住んだと注記される塚目太郎家政がでてくる。武蔵国内で「フツサ」と表記される地名は福生市域しかない。またこの人物は「駿河伊達系図」の記述の前後関係から鎌倉時代の人と推定できる。福生市域に直接関係する中世史料は少なく、特に鎌倉時代は皆無といっても過言ではない状況である。したがって、塚目家政について調査することは、福生の鎌倉時代を考える上できわめて重要な意味をもってくる。そこで平成三年十一月十五・十六日の両日、塚目氏の本拠地と推定される福島県伊達郡桑折（こおり）町・国見町を調査した。

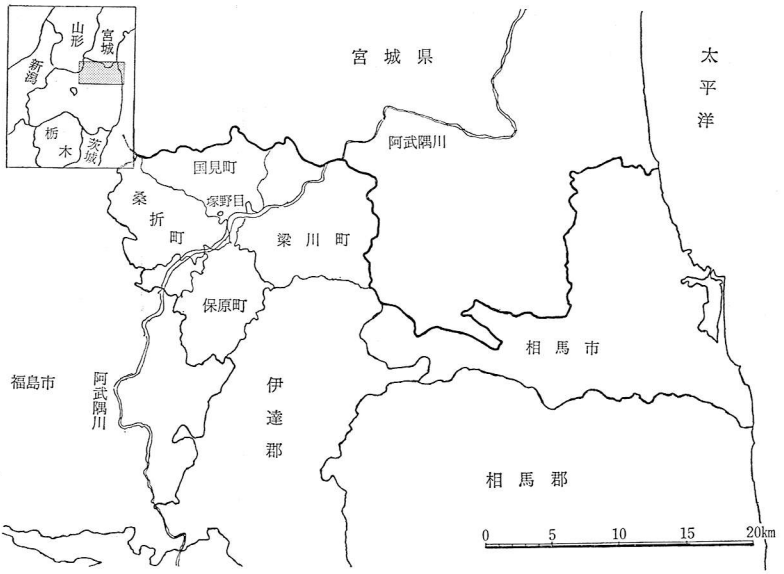
調査地の設定

調査地を福島県伊達郡桑折町・国見町に設定した理由について触れておきたい。

「駿河伊達系図」は南北朝時代に足利尊氏の家人として活躍し、駿河国入江庄（静岡県清水市）内に所領を与えられ土着した、伊達景宗の系統の系図である。

「伊達」という名字からわかるように、戦国時代の奥州で名を馳せた伊達政宗と祖先を同じくする一族である。この系図自体も奥州伊達氏の系譜を研究する上で注目されている史料である。

さて、その系図にみえる塚目太郎家政は、当然のことながら伊達一族である。伊達氏はもともと常陸国真壁郡伊佐



内大臣正二位　藤原氏元祖

大職冠鎌足公――（中略）――朝宗

宗村　常陸介　初号時長　康元々年十月二日卒、法名念西
下野国中村領主、後奥州合戦之忠アリ伊達郡ヲ
給ハル、依此末流号伊達

為宗　皇后宮権大進　号伊佐
文治五年八月八日於奥州伊達郡先陣進討捕佐藤高名
承久兵乱ノ時於宇治川死　為家ヲ為養子家ヲ相続ス

為重　常陸二郎　号殖野二郎
同兄高名、下野国ニ住中村領主

資宗　蔵人大夫
資綱共云義広共云　同兄高名、康元々年九月廿三日
卒、卅三法名覚仏

為家　同兄高名、四郎左衛門蔵人
鎌倉由井ニ居住

女子　大進局
右大将頼朝将軍妾、貞暁法印之御母
伊勢国三箇山領主

- 為政　判官代
  - 女子　芦名妻
    - 為時　判官代二郎　祖父ノ子ト成
- 為時　塚目二郎
  - 家政　塚目太郎　住武蔵国フツサ
- 経家　右衛門蔵人　住下野国若田部
- 経堅　四郎蔵人
- 経光　掃部助
- 明円　助僧都祐我共
- 某　七郎蔵人
- 時家　八郎

庄中村（茨城県下館市付近）に住み、中村氏あるいは伊佐氏を称していた一族である。その一族は文治五年（一一八九）の源頼朝による奥州攻略の際に戦功を挙げ、伊達郡を与えられたという。[2] はじめに塚目を称する為時の父為家は為宗・為重・資綱等の兄弟と共に、この戦に参加している[3]ので、伊達郡内に所領を与えられたものと思われる。とするならば、伊達氏の本拠となった伊達郡あるいは、本領であった伊佐庄付近に塚目氏の本拠地があると推測できる。そこで、地図で確認すると伊達郡国見町に塚野目（つかのめ）という地名を発見することができた。よってこの地が塚目氏とかかわりがあるとみて調査の対象とし、また桑折町は国見町と隣接している町で古代の郡衙があり、この地域の中心であったこと、さらには、伊達氏が本拠を置いた地として対象にしたのである。なお、国見町には厚樫山（『吾妻鏡』などでは阿津賀志山）から阿武隈川にいたる長い土塁がある。これは先にも触れた頼朝の奥州攻略の際、奥州藤原氏が支配地防衛のために築いたもので、いわばこの付近は鎌倉幕府と奥州藤原氏の支配の接点といえる地域である。

文献にみられる塚目氏

調査に赴く前に、可能な限りの文献で塚目氏を追ってみた。

『姓氏家系辞典』（太田亮編）には、「塚目　ツカノメ　ツカメ　岩代（伊達郡）、陸前（志田郡）等に此の地名あり。岩磐、陸前等に存す。」と記されているだけで、具体的な人名をあげるに至っていない。

「駿河伊達系図」に見える塚目氏は四男為家の子である為時が塚目二郎と号するのが最初である。家政は為時の子あたり、塚目を称するのはこの二人で絶えている。『寛政

重修諸家譜』などほかの伊達氏系図には塚目氏はでてこない。わずかに「下飯坂家譜」（『福島市史』6資料編原始・古代・中世）に家政の名を為家の子として見ることができる。しかし、注記には「伊達中村彦四郎　正嘉二年七月十一日没、年五十八、母畠新左衛門尉藤原資弘女」と記されるだけで塚目と称したことは出ていない。家政の子孫は飯坂（福島市）に土着して飯坂氏を称している。

地元の『国見町史』の通史および中世関係の史料には塚目氏にかかわる記述・史料はみることはできなかった。ただ、『国見町史4　現代・村誌・民俗』の「村誌」の部分の「明治十四年塚之目村誌」の中の古跡の項に『古城址　中部「館前」ニ在リ、（中略）塚之目太郎正則ナル者居ル所ト云伝フ正則ハ何年中ノ人ナルヤ考フ可カラス、或云佐藤荘司元治ノ臣ト、』とある。

塚目氏に関する情報は、以上のようなものがあった。

調査概要

十一月十五日、編さん委員の久保田昌希氏・研究調査員の大久保俊昭氏と私の三人は、現在町史編さん事業が進行中である桑折町史編纂室を訪ねた。町史編纂室では同室の田島昇氏とこの地域の歴史に造詣の深い菊池利雄氏の二人が対応していただいた。両氏から桑折・国見地域の古代・中世の概観などの説明をうけた。両氏による説明の概略は次のとおりである。

①国見・桑折町付近は古くからこの地方の中心地であった。国見町には塚野目古墳群・沢田古墳群など多くの古墳があり、古墳時代の中心であった。また、『和名類聚抄』にみえる信夫（しのぶ）郡に属す郷のうち、伊達（いだて）郷が国見町・桑折町地域と考えられている。

②桑折町のこおりは「郡（こおり）」が転化したものといわれ、古代の郡衙所在地であったという。国見町内には条里制遺構があり、国見町の水田の大半が条里制遺構に基づくものだという。

③桑折町内の下万正寺遺跡から出土した古瓦の文様は、鎌倉市二階堂にある永福寺跡から出土した古瓦と極似しているといわれ、同地に一三世紀前半の文化が流入していたことがわかる。

④このような状況を考えると、伊達一族が伊達郡入部のおり、保原町の高子岡に居を定めたという『伊達正統世次考』の記事は一考すべき点がある。

⑤桑折・国見町域には、鎌倉から戦国時代にいたるまで大小数多くの城館址がある。塚野目にも館址は存在する。

⑥塚野目には、南北朝期には南朝の北畠一族がいた。以上である。なお両氏の話の中からは、塚目氏にかかわる点はなかった。

その後両氏に案内をいただいて、国見町塚野目地区の見

学をした。

塚野目城址の見学

塚野目地区は国見町の南端にあり、桑折町と境界を接する阿武隈川の河岸段丘上にある。古くは塚野目古墳群、条里制遺構があり歴史ある地区である。ここに今回の調査で私たちが最も注目する塚野目城址がある。

塚野目城址の概要については、菊池氏から説明いただいたが、その内容は次の通りである。

所在地　国見町大字塚野目字館前

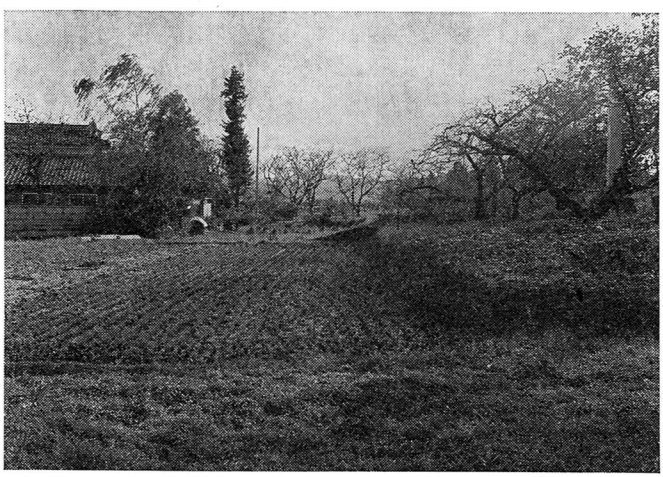
規　模　東西約一二五M　南北約九〇M

水濠幅　南側七～一〇M　北側約一二M

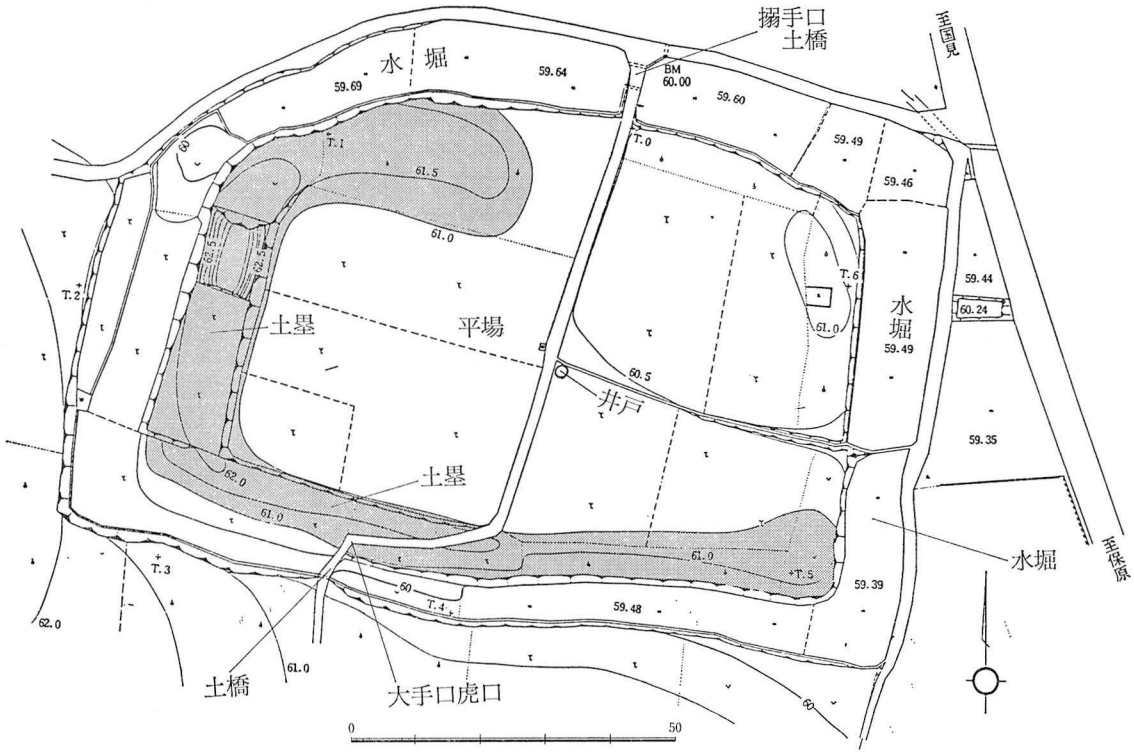
水濠深　計測していない

形　態　単濠単郭

現在、城郭部は果樹園・桑畑として利用され、水濠は水田となっているが、西側には高さ一〇メートルの土塁が残っている。大手門は南側にある。土橋をわたり虎口をはいると篠(かざし)土居があり城郭内部が見えないようになっている。これは南北朝以降の虎口の形態である桝形へと変化していく過程の形態として重要なものということである。搦手は北側にあり土橋をわたり城内へとはいるようできている。大手と搦手の虎口のちがいは、この城址が鎌倉時代に造ら



塚野目城址



塚野目城址実測図（「国見町史通史編」収録のものに加筆）

れ、南北朝期に改修されたことを示しているという。

この城の主については、明治十四年の「塚之目村誌」にあるように、伊達一族に滅ぼされた佐藤荘司元治の家臣塚之目太郎正則という伝承がある。また成立年次はわからないが『北畠武鑑』・『霊山軍記』[4]という南北朝の戦いについて著わした軍記物語に塚目城主として北畠正教の名が出てくる。『霊山軍記』では正教は高師直に攻められ、塚目城で戦死したことになっているが、これは藤田城をめぐる貞和三年（一三四七）の合戦の誤認である。いずれも伊達一族の塚目氏とはかかわりはない。しかし、塚目城址の築城が鎌倉時代であることは、伊達一族塚目氏が同地に存在した可能性を示すものといえるであろう。

塚目城址見学のあと、藤田城跡・石母田城跡・高館城跡など、伊達一族の城跡を見学して、その日の調査を終えた。

翌十六日は、福島市内にある県立図書館をたずね、関連資料の調査を行った。

調査の成果から考えられること

今回の調査は「駿河伊達系図」に見られる塚目太郎家政の存在を確かめるのが目的であった。伊達一族である塚目氏の本貫地が伊達郡内にある塚野目であることは確認できた。また鎌倉時代に築城されたと思われる塚野目城址は、塚目氏の存在を認識するのに充分なものといえる。しかし、塚目氏自体に関する史料・伝承が皆無なのはどういうことなのであろうか。このことは塚目氏が塚野目という在地に対して土着化をとげる前比較的の早い時期に同地を離れていたことを意味するのではなかろうか。すなわち塚目氏は在地名を名乗りながらも、何らかの政治的理由で塚野目を離れていったと想定しえるのである。

ところで「駿河伊達系図」には、祖父為家は鎌倉由比ケ浜に住み、承久三年（一二二一）の宇治川合戦で戦死した長兄為宗の跡職を継いだとある。このことは為家の所領が常陸国伊佐庄にあったことを示している。また為家の子で家政の叔父となる経家は下野国若田部に住していたとしている。さらには「下飯坂家譜」にみえる家政が伊達中村彦四郎と称していたことは、為家系の人々が伊達郡より関東に展開することが多かったことを示していると考えられる。この点からすれば推測の域を出ないが、塚目氏もまた本貫を陸奥伊達郡にもちながらも、関東においても自らの所領を所有し、他の一族とともに展開していることは充分に考えられるであろう。その点で興味深いのは平安後期から鎌倉初期にかけて福生市域のうちを平山季重・俊重が支配していたということであろう。とくに俊重は「小川系図」に見られるように、幕府から地頭職を与えられている。したがってこの時期には、平山氏が保有していた福生村の地頭

職をなんらかの理由で失い、ついで伊達氏がその地頭職に補任され、家政が管理者として福生に住することになったのではなかろうか。そのため塚目氏の伝承が本貫地である伊達郡内にも残らなかったものと思われる。したがって鎌倉時代の一時期、福生は伊達氏の東国における基盤としての意味を持ったと考えられよう。

なお「下飯坂家譜」にみえる家政の母の父畠新左衛門尉藤原資弘がどこの人かがわかると、父為家の動向がわかり、あるいは、そこから家政と福生の関係がみえてくるかもしれないが、これは今後の課題とせざるをえない。

最後に現地でお世話になった、田島昇氏・菊池利雄氏ならびに、桑折町史編纂室の皆様に記して感謝の意を表わしたい。以上が簡単ではあるが、今回の調査の概要とそこから考えたことである。

註

(1) 「駿河伊達系図」は京都大学文学部博物館に所蔵される「駿河伊達文書」中に含まれるものである。

(2) 念西が伊達郡を与えられたとする具体的な史料はないが、『吾妻鏡』建久二年(一一九一)正月二十三日条に「伊達常陸入道念西」とみえ、奥州合戦の翌年には伊達郡を与えられたとみられる。

(3) 『吾妻鏡』文治五年八月八日条

(4) 両史料とも『国見町史』(第二巻原始・古代・中世・近世資料)による。

(こまつ・としはる　福生市史中世調査員　川崎市在住)